

## 2011年の初めに

11.01.10 守山裕次郎

一昨年、「一度政権を任せて下さい」との民主党のキャッチフレーズに、長年にわたる自民党政権に辟易していた多くの国民が、不安を感じながらも任せてみたのだが、まさかこれほどまでに期待を裏切られると考えた人が、はたしてどれほどいたのであろうか？

鳩山前総理など、今後彼が何を語ろうと、国民は全く信用しないにもかかわらず、またしても前言を翻し、議員を続けることにしたそうである。一方で小沢元幹事長は、3人の秘書が逮捕され、次から次へと億単位の金の流れに疑惑が出ているにもかかわらず、これまた前言を翻し、「国会の場での説明など必要ない」との一点張りであったが、さすがに形勢不利と見たのか、急遽、政倫審に出席する方向に作戦変更したようである。(??)

昨年5月、鳩山前総理の突然の辞任を受け、バトンタッチした菅総理に当初は若干期待した国民もいたようだが、今ではその支持率が20%を切るのも時間の問題となっている。特に先の尖閣列島での中国漁船衝突事件では、仙谷官房長官とのコンビによる対応の拙さが際立ち、その間隙を突かれ、ロシア大統領による北方領土視察というかつてない深刻な事態をも引き起こす結果を招いたが、この一連の出来事の結果責任は極めて重大である。

そもそも鳩山前総理による、普天間基地移設問題に端を発した日米同盟関係の揺らぎが、すべての事件の発端とも考えられ、その意味で彼は「万死に値する」ののだろうか、本人に全くその自覚がないのが「宇宙人」たるゆえんでもあり、国民にとっては悲劇である。

ただ、この一連の出来事を通じ、強いてプラスを考えれば、尖閣での事件がきっかけで、中国という国の本質が判ったことに加え、日本国憲法の前文にある「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して・・・」などの文言は、そうあってほしいと願うただの「空念仏」であり、信頼に足る国など日本周辺には、一国も存在しないことが証明されたことにある。

厳しい現実から目そらし、国家存立の基盤である国防問題について、長きにわたり全く関心を示さなかった多くの国民が、遅まきながらもようやく覚醒されつつあることは大変喜ばしく、その意味である中国人船長の貢献は、極めて大きかったと言わざるを得ない。

戦後すでに65年、この国はあらゆる分野での制度疲労が顕在化している。昨年発覚した検察による証拠改ざん事件など、誰が想像することができたであろうか。何年前に耐震偽装事件で驚かされた我々だったが、もはや検察までもが信用できないというこの国は、どうしてここまで墮落してしまったのであろうか？

思い起こせば、昭和40年頃からの高度経済成長の中、かつて植木等が歌っていた「サラリーマンは気楽な稼業というモンダ・・・」という歌詞そのままに、周囲を見渡しながらい、スイスイと上手に世渡りする人間が賢く、真面目に真剣に物事に取り組むことなどバカらしいという風潮がはびこり、自分だけの目先の損得を追求する国民性へと変化していった。そしてとどまることを知らない欲望に負け、虚構に虚構を重ね、最後は究極まで膨らんだバブルが昭和の終焉とともにひじけ、その後20年余りが経過した今日でも、その後遺症は

深く残り、気がつけば九百兆円に近い莫大な借金をかかえる国家になってしまったのだが、この期に及んで、まだ財政の半分以上を借金で賄っているというこの国は、どう考えても「危機そのものにある」のであろう。

加えて、危惧される事は単に財政的な側面だけでなく、より深刻なのは日本人としてのメンタリティーの問題である。高度成長～バブル期を過ごした我々「団塊の世代」以前の年代には、ややもすると額に汗して自ら努力することを避け、「他力本願的生き方」を志向する人も多かった。その背中を見て育った年代が今では子供を持つ親となり、その一部がいわゆる「モンスターペアレント」にもなっていて、子供たちへの更なる悪影響を考えると、この「負の連鎖」をいかにして終息させるかが、まずは当面の最大課題である。

今更、「清く・正しく・美しく」生きるべきとは言わないまでも、かつてのわが国に存在した「武士道精神」に代表されるような「日本の美意識」を復活させることが急務である。特に、「恥ずかしいことを意識する精神」は、ルース・ベネディクト女史がその著書「菊と刀」で指摘したように、かつての日本人の根底に流れる意識の中にあり、これがすべての個々人の行動を律してきた。しかしながら今では、先に述べた前総理や元幹事長の行動を見ても、その精神の片鱗さえも認められないという悲しい現実を踏まえ、原点に戻り、まずは子供の頃からの教育や躾を見直し、この精神の復活による意識改革を図るしかない。

21世紀に入りすでに10年が経過した。急激な少子高齢化社会の到来を目前に、日本の現状を考えると、現在我々は、明治維新や太平洋戦争時に匹敵する危機に直面していると考えても過言ではない。勿論、ここ数年で一挙にこの国がどうかなるということではないものの、現状のままの延長線上には、「国家財政の破綻」が確実に待ち受けている。

我々「団塊の世代」以前の間人は、それでも辛うじて何とか無事「あの世」に行けるであろう。しかしながら、残された莫大な借金を背負わされた上、少ない人数で多くの老人を支えざるを得ない次世代の人たちには、実に厳しい将来が待ち受けている。この国家の危機にあたり、このような事態をもたらした責任を有する我々世代は、次世代の人たちのために、今何ができるのであろうか？

かつて日本経済が絶好調だった頃（'80年代）、その繁栄の要因を分析した「ジャパン・アズ・ナンバーワン」がベストセラーとなった時代があったが、今となってはまさに隔世の感がある。そしてその頃、30年後の今日の日本の姿を想像した人が、はたしてどれほどいたのであろうか。

いつの世も、平家物語にある「驕れる者久しからず、盛者必衰の理をあらわす・・・」の格言通りなのであろう。戦後、廃墟の中から奇跡の経済復興を遂げ、一時はバブルに酔いしれ、その拳句の果てが現状である。この過程を実際に体験した我々は次世代の人たちに、「勝って驕らず、負けて腐らず」の精神を伝え、本来日本人が持っている資質と伝統の素晴らしさを再認識させ、物質的豊かさへの欲求はほどほどに、「心の豊かさとは何か？」について個々人が考え、信念を持ってそれに向けて努力することの大切さを、是非伝えていきたい。

閑話休題。

1. この正月、二日間にわたる「箱根往復大学駅伝」をテレビ観戦した。結果は史上最高の激戦となり、早大が昨年優勝の東洋大をわずか 20 秒余りの差で破り見事優勝した。10 区間、合計 218 km を走ってのこの差である。3 位以下のチームも含め、全区間のすべての走者は、次の走者に例え 1 秒でも早くタスキを渡すため、必死になって走っている姿に大変感動した。(手を抜いた、いい加減な走者は、ただの一人もいなかった) 翻って、我々は「人生の駅伝」を真剣に走ってきたのであろうか? ご先祖さますべての「血と汗と涙の染み込んだタスキ」を受け取り、ここまで走ってきた訳であるが、更に残りの人生を精一杯頑張り、次の世代にしっかりとこの重いタスキを渡したい。
2. 「トイレの神様」という一風変わったタイトルの歌が昨年ブレイクし、年末のNHK 紅白歌合戦でも歌われた。内容は小学校 3 年生の女の子が、祖母から「トイレには神様がいて、毎日綺麗に掃除すると、ベッピンさんになれる」と教わり、それを実践し成長する過程で、一時期、祖母も含めた家族と疎遠になってしまうのだが、祖母が危篤との知らせで急いで駆けつけ、大好きなお婆ちゃんの死に目にやっと間に合うことができ、そこで改めて自分がお婆ちゃんからもらった深い愛情に気づき、心から感謝する・・・という大変心温まるストーリーの歌である。

子供への虐待、更には高齢者への虐待が増え続ける今の世の中で、家族の絆の大切さ、そして「幸せとは何か?」という問いかけに対するヒントのようにも感じた。

以上